

年1万人超離職 経済損失466億円試算

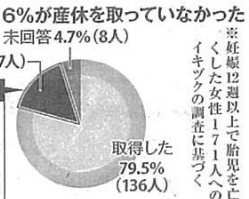
精神的ダメージ 職場の支援不可欠

流産の苦しみ知って

流産を理由に離職する女性は年間1万人を超え、その経済損失は466億円に上るとの試算を名古屋市立大などの研究チームがまとめた。流産や死産による精神的ダメージで鬱病を患う女性も少なくないが、職場の理解や支援は不十分な実情がある。専門家は休暇制度の拡大や、職場復帰後の働き方の選択肢を広げるなど支援体制の強化を求めている。

(中井芳野)

調査は、平成29年9月～令和2年3月に名古屋市中立大病院と同大医学部付属西部医療センターに来院した妊婦らを対象にアンケートを実施。流産歴や年収、健康状態などを質問し、現在の勤務状況について回答のあった1177人を分析した。チームによると、流産経験者571人のうち、少なくとも9%の52人が流産を機に退職したと回答。52人の年収の中央値は398万円だった。一に悪影響を与え、「一般的な流産率の15%を基に、年間の国内出生数から流産件数を年13万件と算出し、流産による退職者は年間約1万1700人、経済損失は総額466億円と推計した。仕事やストレスによる流産への影響は明らかになっていないが、チームの過去の意識調査では「ストレスの多いできこチーム」とや「長期にわたるストレス」が流産の原因と考える回答が多かった。同大産科婦人科の伴野干裕助教授は「仕事で妊娠を助産は『仕事で妊娠を助産は』という考えが退職につながっている」と分析する。



厚生労働省の調査(2年)では、過去5年に流産や死産で子供を亡くした女性の65%に鬱病や不安障害が疑われたことが判明している。岡山大学大学院保健学研究科の中塚幹也教授は「流産を重なるたびに自分を責める女性も多い」と指摘。流産の手術で何度も休むうちに退職を勧められるケースもあると、法的な休暇制度の拡大や、企業は復帰後の働き方の選択肢を広げるなど、サポート体制を広げるべきだ」としている。

タブー視する社会 追い詰められ

共働き世帯の増加とともに、働きながら流産や死産を経験する女性が増えている。約3年前、妊娠37週で出産した息子を産後2日で亡くした石堂雅子さん(40)は、復職当時の心境について「感情に蓋をして必死に働いた」と振り返る。

東京都内のIT企業でマーケティングとして働いており、出産から3カ月で復帰。事情を知る同僚が気を使ってくれたほど申し訳なさを感じた。「普通に生活していいのに、無理やり笑顔をつけた」。

息子は産声を上げなかった。妊娠7カ月で、胎児が先天性横隔膜ヘルニアと呼ばれる、生まれつき横隔膜に穴が開いている難病であることが発覚した。NICU(新生児集中治療室)に運ばれた息子と再会できたのは約3時間後。また目も開いていない



息子が亡くなる前、抱き寄せて母乳を吸わせた綿棒を口に含ませる石堂雅子さん(本人提供)

体はいつかの機械につながれていた。あたにかいわが手を抱き寄せて母乳を温らせた綿棒を口に含ませる。小さくてななてかわいいのだ。うう。なんでも一緒に生きられないの。生後2日の命だった。復帰した職場には手持ちの同僚も多く、子供と過ごす日常がたびたび話題に上っ

た。次第に業務にも影響が出始めた。相手の話が理解できず、パソコンの前では何時間も手が動かない。心身は限界となり休職し、そのまま退職した。

「休んだことへの嫌みをいわれた」「人手不足で調子が悪くても休みにくい」。石堂さんが代表理事を務める団体が運営するウェブメディア「SORATOMO(ソラトモ)」には流産経験に関する切実な思いが寄せられる。

流産経験者らの支援団体「イキツク」の調査でも98%が職場復帰後に悩みがあったと答えた。内容は「精神的な回復状況」「次の妊娠出産」「周囲の反応への不安」などが多かったという。

石堂さんは「子供を失うのは人生で最もつらい経験のひとつなのに、復帰した職場では流産や死産、新生児死をタブー視したり、なかったこととして扱ったりする雰囲気を目の当たりにする。企業側の理解が十分にならないと、女性は追い詰められてしまう」と話した。